

(10) 多人数用透析液供給装置における透析液水質管理状況 (図表10)

論文の概要

日本透析医学会 (JSDT) による2006年末および2007年末の統計調査における、「透析液水質管理状況」の調査結果を比較検討した報告である。

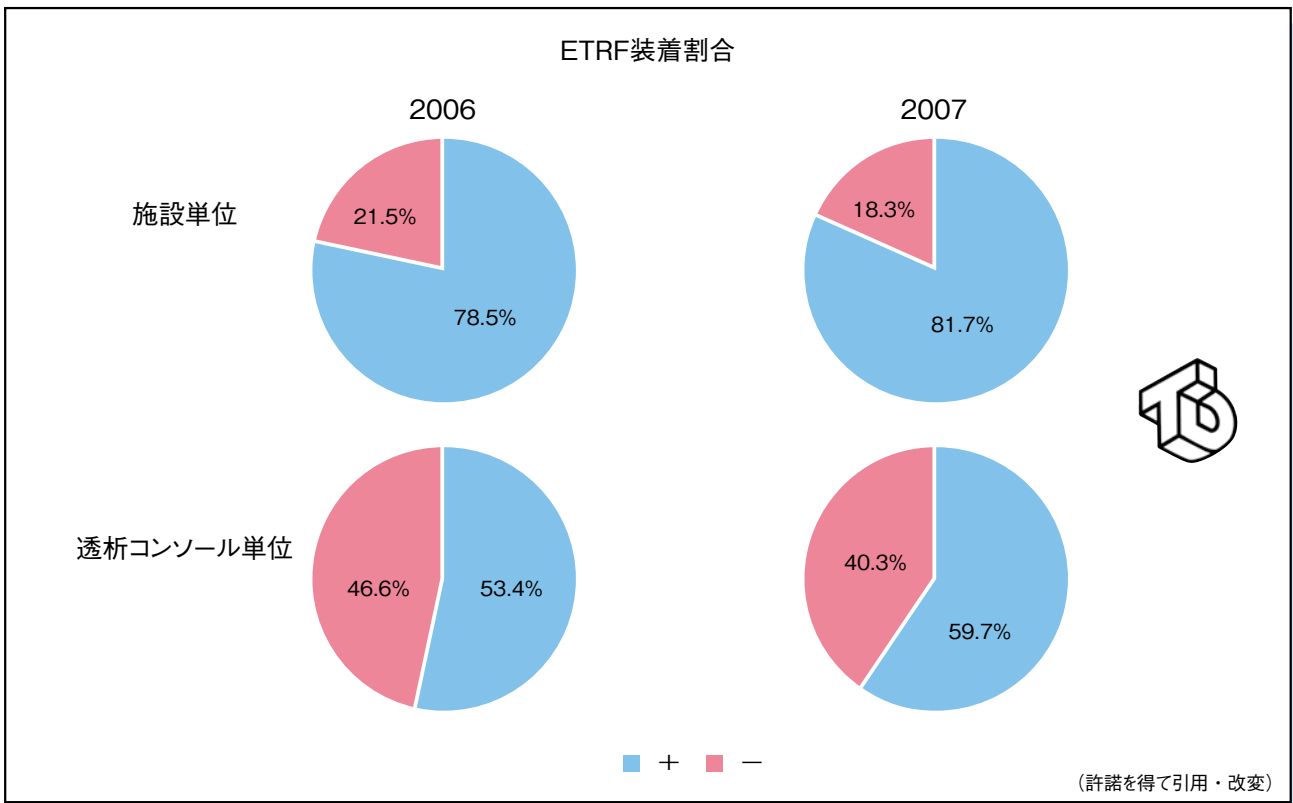
タイトル: Bacteriological Water Quality in the Central Dialysis Fluid Delivery System from the Survey of the Japanese Society for Dialysis Therapy

著者: Masakane I, Takemoto Y, Nakai S, Tsubakihara Y, Akiba T, Watanabe Y, Iseki K

収載: Blood Purif 2009; 27 (suppl 1): 11-16

2006年末および2007年末の統計調査において「透析液水質管理状況」の調査項目に回答のあった3,985施設 (2006年末) および4,050施設 (2007年末) を対象とし、その調査結果を比較検討した。

JSDTの透析液水質基準であるエンドトキシン (ET) 濃度0.05EU/mL未満および細菌数100CFU/mLを達成している施設の割合は2006年末はそれぞれ89.1%、96.9%と非常に高い達成割合であった。2007年末の調査では、ET濃度0.05EU/mL未満および細菌数100CFU/mLを達成している施設の割合はそれぞれ93.6%、97.4%と更に改善していた。ET捕捉フィルター (ETRF) の装着割合は、2006年末と2007年末を比較すると、施設単位においても透析コンソール単位においても増加していた (図)。



解説

わが国の多くの透析施設では多人数用透析液供給装置 (CDDS) が使用されており、諸外国で多く用いられている個人用透析液装置と比較して、生物学的汚染防御に弱点を抱えるとの懸念が指摘されていた。本研究の結果から、CDDSを主体とするわが国の透析液水質管理状況は非常に高いレベルにあり、経年的に更に改善されていることが示された。この研究ではETRFの装着の有無についても調査されているが、2006年末の調査では78.5%の施設においてETRFが使用されており、その割合は2007年末には81.7%に増加していることが示されている。また、2006年末の調査では日本全国の透析コンソールの53.4%にETRFが装着されていたが、2007年末の調査結果では装着割合は59.7%に増加していた。ETRFは透析液清浄化の最終の安全弁であるが、ETRFを設置するだけでは充分とは言えず、ETRFより上流の水質管理がより重要であり、JSDTは2011年に「ETRF管理基準」の策定を行った (川西秀樹ら。透析会誌44 (9): 977-990, 2011)。